

田中功起
映像上映 / アッセンブリー
『抽象・家族』

TANAKA Koki
Screening / Assembly
“Abstracted / Family”

9.7 Sat

愛知県美術館 10 階

Aichi Prefectural Museum of Art 10F

9.21 Sat

豊田市美術館 講堂

Lecture Hall, Toyota Municipal Museum of Art



眠れない、暗く長い夜、あなたは誰のことを最初に思い浮かべるだろうか。かつての恋人だろうか、いまの自分のパートナーだろうか、あるいはあなたを傷つけた友人だろうか、それとも家族だろうか。

家族・1

あなたがこの場所に存在することは、その家族史の中の、さまざまな偶然的な出会いの連なる結果であり、その意味では、あなた自身の家族史を含む、人類史のひとつの到達点でもある。

「家族」という言葉にはいろいろな響きがある。伝統的なあり方からナショナリズムへと結びつけられ、一方で一時的な繋がりの中で育まれる関係、例えば映画制作クルーを指して家族のようだという事もできる。

思想家の東浩紀は家族の特徴を次の三つに分けている。強制性(簡単には入退出ができない集団)、偶然性(子どもは偶然なものとして生まれてくる。家族構成のたまたま)、そして拡張性(一緒に住み、同じ釜の飯を食べれば家族である。かならずしも血縁関係ではない)。つまり「家族」というとき、その集団はある程度の強固な繋がりを持ち、でも偶然に構成され、なおかつ拡張可能であるようなものを指す。

「家族のメンバーシップは私的な情愛だけで支えることが可能なので、ときに種の壁すら越えてしまう。それは憐れみ(empathy)が引き起こした誤配(misdelivery)である」

(東浩紀「第五章 家族」『ゲンロン0 観光客の哲学』株式会社ゲンロン、2017)

例えば猫などのペットを家族の一員であるとぼくたちは言う。種の壁すらも越えてしまう情愛をもつ家族概念の拡張性。一時的に生活を共にするだけでも、ある種の繋がりが生じる可能性はあるかもしれない。

ルーツ

海外をルーツとする親を持つ人びとを日本ではまとめて「ハーフ」と呼び(Half Brazilian、Half Japaneseの

ようには言わずに)、さらに「外国人」と見なす。彼ら・彼女たちの国籍が日本であっても、あるいは日本で育ったとしても、例えば多少の外見的な違いがあるだけで「外国人」と名指される。つまり差別の対象になる。パリやロンドン、ロサンゼルスなどでの生活経験がある人からすれば、そもそもこの感覚は不思議なものに感じるだろう。さまざまなバックグラウンドを持つ人びとが多く暮らす街の中で、上記のような「日本人」と「外国人」というような二分法は意味をなさない。

このプロジェクトに登場する主人公たちは、ボリビアや朝鮮半島、バングラディッシュやブラジルにルーツがある親を持つ。日本で生まれたり、子供のころに日本に来ているから、母語は日本語であり、日本の文化環境の中で育った人びとである。

日本には、日本人は単一民族であるという幻想がある。小さな島国であっても、それぞれの地域には別々の文化があり、食べる料理にも違いがある。もちろん沖縄の人びとやアイヌ民族を考えれば簡単には「単一民族」であるとは言えないはずだ。このプロジェクトのアドバイザーをお願いした社会学者の下地ローレンス吉孝さんの研究から明らかなのは、第二次世界大戦後、海外ルーツの日本人は既に日本社会の中に存在し、日本国籍をもつにも関わらず、外見やルーツによって「外国人」化され、見えなくされてきたことだ。移民をめぐる問題は、近年の課題として日本で扱われるが、多様な日本人像が定着していないこと自体を本来は疑うべきなのだ。

ソーシャリー・エンゲイジド・アブストラクト・ペインティング (社会関与的抽象絵画)

抽象絵画は、色と形を認識しうる視覚機能を備えた、ある意味では普遍的な人間像を観客として想定する。それは時代や地域、人種も越える。抽象絵画は、その意味では、平等という思想を前提にしている。もちろんそれが理由かどうかはわからないけど、以前ぼくがギリシャのアナーキスト・カフェやインディペンデント・ブックショップ、難民支援センターなどを調査で訪ねたとき、そこにはなぜかいつも抽象絵画が壁にあった。

今回、抽象絵画を出演者たちに描いてもらうにあたって、社会政治史とどのようにペインターたちや絵画制作が関連づけられるのかを、キュレーターの蔵屋美香さんに考えてもらった。彼女は、2011年の東日本大震災と絵画を繋げる展覧会を企画していた。出演者による絵画制作も、ペインターであり友人でもある佐々木健に手伝ってもらった。そういえば、この三人で震災から一年後の2012年に被災地を訪れたことがある。

絵画制作は、ペインターがひとり絵画スタジオに籠もって行われる、社会と断絶した行為であると思われがちである。しかし、例えば1930年代以降、ナチス政権下で退廃芸術として認定されたペインターたちは難民化し、その多くはアメリカに亡命し、それが別のアートシーンを作ったことはよく知られている。あるいは、ローラ・オーウェンスは自分の作品の発表の場所を地元のコミュニティのためのスペースとしてオープンし、総合的な活動としてアート・プラクティスを捉えている(後にその場所が反ジェントリフィケーションの象徴として糾弾され、スペースが閉じたことは残念だったけれども)。つまり社会の動向の中にアーティストも巻き込まれている。

田中功起

1975年栃木県生まれ
京都府拠点

「複数の人間が、過去、現在、未来において、ある出来事や経験を共有することは可能か」という問いをめぐり、記録映像やインスタレーションの展示、テキストによる考察、トークや集会の企画など多様な方法で探求している。撮影のために組織される仮構の共同体で生じるズレや失敗も含め、個人や集団の営みを凝視し、その内と外にある社会、歴史、制度を含めた考察そのものを作品の一部として開示。その根底には、現代アートを取り巻く既存の枠組みや制度を検証し、再定義しようとする批評性が貫かれ、作品制作と並行して執筆や言論活動も精力的に展開している。



Photo: Motoyuki Daifu

主な作品発表・受賞歴

- 2018 個展「Vulnerable Histories (A Road Movie)」ミグロ現代美術館、チューリッヒ(スイス)
- 2017 ミュンスター彫刻プロジェクト2017、ミュンスター(ドイツ)
- 2017 第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ「VIVA ARTE VIVA」ヴェネツィア(イタリア)

家族・2

今回ぼくは、「家族」という単位から人びとの来歴を見つめなおす。このプロジェクトがなければ出会うことのなかったばらばらの四人。彼ら／彼女たちは、複雑な文化的ルーツ(かつての日系移民政策や戦争、あるいは人の、グローバルな移動の中で生じた結果として)と多様な背景を持つ人びとである。

劇場の中には家族史と個人史が反響し、スタジオでは抽象絵画が制作される。演じられた言葉と自分の言葉、疑似家族とそれぞれのリアルな家族史、そして4人の協働によって描かれた異なる形式が同居する抽象絵画と、四人が織りなす会話や行為の集積としての生活。一軒家に集まった、いわば偶然的な「家族」の暮らしは、フィクションと現実の間で、いつの間にか私たち自身に「自分とは何者であるのか」という原理的な問いを提示することになるだろう。

(2019年6月・東京と京都にて)

TANAKA Koki

Born 1975 in Tochigi, Japan
Based in Kyoto, Japan

Through various methodologies such as documentary style video, installation work, critical writing, and also curating public talks and gatherings, Tanaka Koki explores the question of how people can share a past, present, or even future experience or events as one's own. He assembles temporary communities for his film and captures people's behavior including slippages and missteps; it unlock the very considerations to the social, the historical, and the institutional aspect of these human activities. In parallel to his artistic production Tanaka is vigorously developing his activities as a writer and speaker, following through on his critical intuition, which has led him to investigate the existing frameworks and institutions surrounding contemporary art, and to attempt to redefine them.

Selected Works & Awards

- 2018 *Vulnerable Histories (A Road Movie)* (solo), Migros Museum für Gegenwartskunst, Zürich, Switzerland
- 2017 Skulptur Projekte Münster, Münster, Germany
- 2017 57th Venice Biennial, *VIVA ARTE VIVA*, Venice, Italy

プロジェクト・タイトル: 抽象・家族

制作年: 2019

形式: 撮影する、演じる、絵を描く、感情を表す、手紙を書く、料理をする、会話を
する、穴を掘る、食べるなど

要素: 映像 (約28分、約33分、約47分)、絵画、写真、ラジオ、アーティスト・ノート、
エンド・クレジット、テーブル、椅子、その他

出演者:

下地クラウドディア

中川愛

橋本清

安田直人

インタビュアー、アドヴァイザー: 下地ローレンス吉孝

アドヴァイザー: 蔵屋美香

絵画制作インストラクター: 佐々木健

事前勉強会レクチャー: 清水知子

制作管理・助監督: 佐藤駿

ラインプロデューサー: 大館奈津子

撮影監督: 青山真也

録音: 藤口諒太

撮影: 森内康博、飯岡幸子

撮影助手: 宮澤響、中村碧

録音助手: 鈴木万理

制作助手: 角田里紗

劇場照明: 山下恵美+帆足ありあ+冨田章子 (株式会社 流)

会計: 藤東亮太

撮影補佐: 佐藤未来

録音補佐: 及川菜摘

制作応援: 河野真歩、西尾佳那、染谷有紀

撮影応援: 鄭梨愛、宮川知宙

ロケーション: 早稲田小劇場どらま館、中村邸、blanClass、レストランHomer、

日本キリスト教会 府中河原教会

ポスト・プロダクション

カラーグレーディング: 青山真也

整音: 藤口諒太

英語字幕: ディーン島内翻訳事務所

字幕スポットティング: 浜岡直子

あいちトリエンナーレ2019 展示バージョン

展示施工: HIGURE 17-15 cas

チーフ・インストーラー、展示アドヴァイザー: 有元利彦

アシスタント・インストーラー: 笹尾千草

インストーラー: 駒崎継広、五味宏章、村上昌史、虎岩慧、西野隆史、及川崇

展示機材協力: キヤノンマーケティングジャパン株式会社

3Dモデリング: 川田諒一

テキスト翻訳: アンドリュウ・マークル

あいちトリエンナーレ2019

芸術監督: 津田大介

チーフ・キュレーター: 飯田志保子

キュレーター: 相馬千秋

プロジェクト・マネージャー: 塩津青夏

アシスタント・キュレーター: 黒田和士、藤井さゆり

コーディネーター: 村松里実

シンガポール・ビエンナーレ2019

芸術監督: ハトリック・フロレス

キュレーター: アンカ・ヴェロニカ・ミヒュレット

青山目黒

青山秀樹、吉田杏、大賀智子

ビタミン・クリエイティブ・スペース

チャン・ウェイ、ワー・ファン、シューラン・ゾウ、カイキィ・モック、シー・モン

スペシャル・サンクス / ロケーション: 中村大地、中村直子、小林晴夫、

宮崎晋太郎、大石周平

スペシャルサンクス: 沖山敏子、東浩紀、五月女哲平、一色事務所、青山真也、
佐藤克久、増田千恵、登山博文、山本さつき、吉田有里、野田智子、谷口裕子、
山本寛介、奈良介、稲葉諒、上田由至、佐藤純也、大槻英世、染谷有紀、三枝喬之、
大河内雅浩、武部敬俊、山下幸司、田内公康、伊藤雄雄、ハン・トンヒョン、
真島宇一、清水聡美、戸石あき、田中久美恵

プロデューサー、監督、アーティスト、編集、展示デザイン: 田中功起

このプロジェクトはあいちトリエンナーレ2019、シンガポール・ビエンナーレ
2019、麻生グループのサポートによって制作されています。

「あいちトリエンナーレ2019」ハフォーミングアーツ AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator

相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator

藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator

清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director

尾崎聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration

山崎佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation

Art Translators Collective

(相磯展子、ベン・ケーガン、リアン・キャンライト)

Art Translators Collective

(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer

鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集: 鈴木理映子

デザイン: コバヤシタケシ (SURFACE)

印刷・製本: 藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代 2019年8月1日 [木] - 10月14日 [月・祝]

主な会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか (四間道・円頓寺)

豊田市 (豊田市美術館及び豊田市駅周辺)

芸術監督: 津田大介 (ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主催: あいちトリエンナーレ実行委員会

助成: 損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド

一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion

August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday), 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)

Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and venues in the vicinity of Toyotashi station)

Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)

Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc. [SOMPO ART FUND]

(Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation

of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the

Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan

Foundation for Regional Art-Activities

